

演劇



哲学ドラマ:「愛すること・愛されること」
(2014.10.13)



「恋する身体」
(2014.2.8)

私の身体をさがして

～ 哲学ドラマといういとなみの中で

松山 侑生

私は今、NYのメトロポリタン美術館の中にある、大きな古代エジプト建築の展示を前にして、この原稿を書いています。右の壁面はガラス張りで、冬のNYの白い光が、赤銅色の建物の肌を白く照らしています。私の目の前にある建築物は、確かにそこに存在しているはずですが、目の前にある建物が見えているのに、その現実感がないというのですから、これを読まれている方は不思議に思うかもしれません。座っている大理石のベンチの冷たい質感は、たしかにデニムを通して私のお尻に伝わってきているのですが、目の前の建築物は、なぜか3次元の奥行きを私に差し出してはくれないのです。まるでテレビの画面を見るような感覚で、建物はそこに現れています。私と世界との間には、誰にも見えない一枚のガラスの壁があります。私はそのガラスの向こう側へ行きたい……私を取り囲む人々や物と共に、今ここに在りたい……けれど、どういう訳かうまくいかない……。そんな私の小さな困難が、哲学ドラマという営みを生んだ種となりました。

哲学ドラマとは、私がつくった造語であり、たくさんの方の協力を得て始めることができたワークショップです。哲学ドラマは、Hawaii P4Cの流れを組んだ哲学対話と、障害者が中心となって発展したコミュニティによるセルフヘルプサポート実践である当事者研究を、演劇によって橋渡しし、身体性に根差した思考と対話の空間を拓くことを目指した実践です。私は初等教育や保育の側からこの二つの実践に関わってきましたが、その中で感じたそれぞれの課題点——哲学対話は言語的活動に偏りがち、当事者研究では弱さの開示が求められる——を乗り越えるために、演劇を用いることを思いつきました。というのも、目に見える障害や本当にどうしようもない大きな困難は、意外にもその弱さが足がかりとなり、他者とのつながりを可能にするのですが、それほどでもない困難（例えば一時的であったり、他の人もそれなりに抱えながらなんとか生活できているような類の困難）は、開示することが逆効果になる場合があります。それに、弱さを開示される側の負担もあります。弱さは強さにもなりますが、同時に自分だけでなく相手をも刺し違えてしまう諸刃の剣にもなるのです。そこで、演劇というフィクションを用いること——例えば、登場人物の仮面をかぶること——で弱さの公開範囲を調整できるのではないかと、互いに安全な場所を保ちつつ、つながる方法を探

せるのではないかと、そして何より、身体的フィードバックを活かした哲学的探究が可能になるのではないかと……と、考えたのです。

大変ありがたいことに、UTCPにおいて過去6回、哲学ドラマのワークショップを開催させて頂きました。「愛のダメ男脱出大作戦」「恋する身体」「愛すること 愛されること」、そして「コスプレだらけの対話大会！」と2回の「銀河鉄道の夜の旅（べてるの家／東大駒場）」です（※各回の詳細はUTCP blogを御覧ください）。これらワークショップは大きく「愛すること 愛されること」までの恋愛三部作と、それ以降の二つに分けられます。

前者は哲学対話と当事者研究をどう演劇で繋ぐのかを試行錯誤していた時期でした。イギリス・チェスター大学のアラン・オーウェン氏から教えて頂いた応用演劇をベースに、日本の演劇教育研究者、役者、演出家の方々のお知恵と助力により、哲学対話と当事者研究を演劇で繋ぐ可能性を探っていました。この前期三部作で恋愛を扱ったのは、恋愛は誰にとっても何かしら困難が起こることから、誰もが当事者になれるという点からで、そして実際に当事者研究と哲学対話を繋ぐことができたな、とようやく感じられたのが、「愛すること 愛されること」で行った「誰もが何かの専門家——Disability is Ability——」というワークでした。役者が演じる、叶わぬ恋をしてしまった人魚姫に対して、ワークショップの参加者たちがそれぞれ何かの専門家になり、アドバイスをするというものです。何の専門家になるかは任意ですが、可能ならば自分にとっての弱点を専門家ネームとしてつけてもらいます。自分にとって弱点だと思ふ部分が、困難に直面する他者にとっては力になることが多分にある、それを実際にやってみようとした訳です。実際のワークでは、「先送りの専門家」「相談の専門家」と様々な専門家が生まれ、専門家の知恵を集めて人魚姫の困難に寄り添うことができました。

この前期の経験の最大の功績は、哲学対話と当事者研究の近さと遠さが見えてきたことでした。二つとも「対話型」「コミュニティ・ベース」「自分の考え・経験を扱う」点は共通ですが、探求のスタイルがやや異なります。当事者研究は、障害等に限らない何か困難を抱えた当事者が、仲間と協働しながらその問題の構造を明らかにし、本人や研究仲間と知として還元、アーカイブしていきます。一方、哲学対話は、他者の言葉に触発されながら、各々自らの思考を深めていきます。そのため、前者は「協働学習型」、後者は「自己学習型」の要素が強いと、私は思います。加えて、やはり一番の違いは弱さの開示という点です。哲学対話では、個々人の問題が直接扱われることは少なく、また扱われたとしてもそれをどう解決していくかは本人に任せられます。もっとも、コミュニティ作りに哲学対話を用いている豊田光世氏のような例もあり、一概に哲学対話がこういう傾向にあるとは言えないでしょう。ただ、弱さを公開することが前提としてあり、互い

に弱さを差し出し合い、そして強さへと変えていく営みの中で探求が生まれる当事者研究とでは、やはり趣が異なるように私は思います。

この双方の輪郭が見えてきたところで、演劇でその間をどう繋いでいくか、もしくは乗り越えていくかを考えるという、次のステージに立つことになったのが、「銀河鉄道の夜の旅」のワークショップをはじめとした後者の時期です。実は、今がまさにその只中です。それは得てして、“言葉”と“身体”の関係を再度考えることになると、私は実感しています。どうやって身体で対話するのか、口からの言葉なしでも対話は可能なのか、可能だとしたらそれはどう確認可能なのか……。次のワークショップでは、この課題を探求することになりそうです。

振り返っているところで、不意に話しかけられました。「こんにちは、マダム。よろしければ、少しだけ席を右にずれていただけませんか」紳士的な物言いで話しかけてきた彼は学芸員のようで、彼の後ろには老若男女 20 人ほどが並んでいます。目の前の古代エジプト建築について、ガイドをするようです。私は「もちろんです」と言って席を譲りました。「ご協力感謝します。マダム」

この瞬間、驚くことに、私のガラスの壁はふっと消えたのです。消えたと同時に、赤銅色の壁が私の前にありありと立ち上がり、取り囲む人々の身体からあふれる温度、呼吸、そして個々人の奥行きが生まれ、一人ひとりがそこにちゃんと存在しているのがわかりました。同時に、私の身体も同じようにここに在るのがわかりました。私を取り囲む人や物はそれぞれ奥行きを持っていて、それがまるで 100 色の積み木の津波のように押し寄せてきます。ただ、それは無秩序のようでどこか隙間があり、私はその間にきちんと立つことができています。あまりに美しい世界に、私は怖くなり、自然と瞳から涙がこぼれ落ちそうになりました。

ただ、それも一瞬のこと。再び、ガラスの壁は私の元にやってきて、世界は風のようにになりました。なぜ、あの一瞬、ガラスの扉が消えたのでしょうか。なぜ世界が立ち上がり、その美しい世界は私を圧倒したのでしょうか。

そこでふと思い出したのが、ここ NY で出会ったある女優の方の話です。小雨がちらつくハドソン川沿いの公園のベンチで、彼女は「セリフはただ話せばいいってものではない。自分だったり他人だったり、そのセリフの送り先が必ずあって、その相手が受け取れるように送るもの。だから、相手が受け取れるように送らないといけない。言葉だけでなく、身体全身で。送る／受けることで、互いに影響しあうの」と、セリフの発し方についてレクチャーしてくれました。私は常々、自分の話し方に問題があるように感じていましたが、彼女の話聞いて、ふっとその謎が解けたように思いました。私はそれまで相手に受け取ってもらお

う、言葉の終着点に相手がいるのだという実感が薄かったように感じます。言葉の奥行きがなかったのです。ただ、哲学対話の時はそうではありませんでした。一生懸命絞り出した私の言葉を、誰かがボールと共に受け取って、そこから次の言葉を紡ぎ出してくれる……仲間と共に何かを紡ぎ出す作業の中で、私は自分の言葉が誰かに届くものだということが理解できました。と同時に、自分の言葉と他者の言葉を分けることができました（※心理学でいうところの内言／外言のことなのですが、スペースがないのでまた別の機会に）。これは当事者研究でも同じで、誰かが話した言葉を仲間と一緒に考え、引き受け、共に紡ぎ出す経験から、自分の言葉を探すことができます。言葉が交流する間に、私が見つかるのです。

それが、今度は演劇ということになると、言葉だけでなく、身体という全体で向き合うこととなります。演劇という空間は、そこに人が立っているだけで、言葉が生まれるからです。佇む私の身体（肉体、表情、動き、ムード……etc.）を見て、他者は何かを受け取るからです。私は身体をどこにも隠すことはできません。だから、私の身体はどう見られるのか、どう相手に届くのか……言葉を含む他者の身体を通した交流の中で、今度は私の身体を探すことになるのです。

さて、美術館に戻ってみます。学芸員が私に声を掛けたのは、私の身体を少しばかり移動させるためですが、彼の言葉には私という目的地があっただけではありません。集中してPCを打つ、それも東洋人で英語がわかるかも定かでない相手が受け取れるよう、まるで右手を差し出すように彼は言葉を投げてくれたのでした。彼は私を身体ごと受け止めてくれ、それにより私も自分の身体をそこに開くことができたのです。自分の身体が他者に対して開かれると、他者の身体も私に対して開かれます。そのシンフォニーは美しく、でもとても力強いので、潮の満ち引きのうちに渦ができるように、他者からもたらされる強い感覚に酔ったり、不安や恐怖が呼び起こされたり、葛藤が生じることも……。私のガラス壁は、その渦を避けようとするあまりに、交流そのものを閉じてしまった現れなのかもしれません。

私が哲学ドラマで目指すのは、自分の身体を通して現れる世界の探求——言葉を含む身体的な交流を通した、人と人の間に生まれる生々しくも美しい世界の芽生えと交わりです。ただ、現実的すぎると少しばかり辛い、怖い、慣れていない人のために、フィクションという淡い現実の中でそれを行う場を用意したい、それによって皆さんのガラスの壁——心の壁でしょうか——を、柔らかくストレッチする場になればと思っています。それが、一人ひとり自分の物語を生きるためのお手伝いになるのではないかと私は考えています。誰もが安全に自分の／他者の身体を探すのを、お手伝いできればと願っています。

哲学ドラマと当事者研究

～弱さの情報公開の観点から

水谷みつる

「哲学ドラマ」の原点の一つに「当事者研究」がある。しかし、主として精神保健の分野で展開してきた当事者研究について、聞いたことがない、もしくは、聞いたことがあってもよくは知らないという方が、P4Eを主題としたこのブックレットの読者のなかにはいらっしゃるだろう。本稿ではそうした方々のために、前半では少し詳しく当事者研究とは何かについて、その誕生の経緯も含め紹介する。後半では、私が初めて哲学ドラマにかかわった際に抱いた感想を出発点に、哲学ドラマがもつ当事者研究とは異なる可能性について考える。

当事者研究は、2001年に北海道日高地方にある「浦河べてるの家」という主として精神障害をもった人たちのコミュニティで生まれた。もともと精神科を退院した患者たちの小さな共同住居として始まったべてるの家は、30年以上にわたり独自の活動を展開し、いまでは全国に知られる存在になっている。

べてるの家の活動のユニークさ、そして先見性を一言で表わすのは難しいが、通常であれば頭を抱えてしまうような困った（時に絶体絶命の）状況を、逆転の発想で強みや「売り」、さらには「ワクワク」に変えてしまうところに大きな特徴がある。一年に一度、「幻覚&妄想大会」を開いて、もっとも素晴らしい幻覚や妄想を体験した人を表彰するなど、その最たる例だろう。「偏見差別大歓迎」「三度の飯よりミーティング」「安心してサボれる職場づくり」「勝手に治すな自分の病気」など、べてるの家の理念は逆説に満ちている。

当事者研究や哲学ドラマとも関連の深い「弱さの情報公開」や「弱さを絆に」も、そうした理念の一部である。ここで言う「弱さ」には、障害や病気、その症状だけでなく、生活していくうえでの具体的で細かな困りごとや悩みなども含まれる。一般の社会では、弱点や苦手を大っぴらに曝け出すのはよしとされないことが多いが、べてるの家ではまるきり逆に考える。

精神障害をもって生きるということは、日々、多くの困りごと、すなわち弱さに直面するということである。その弱さを周囲に隠し、無理して一人でなんとかしようとすると、何が起きるか？ まず何より本人がしんどいし、無理が悪循環を招き、限界に達してトラブルを起こしやすくなる。また周囲も、しんどそうな本人を見て助けたいと思っても、どうやって助ければいいのかわからない。

だが逆に、それぞれが自らの弱さを公開すればどうだろう？ お互いがどんな

助けを必要としているのかがわかり、補い合い支え合うことが可能になる。また、無理を重ねている仲間がいれば、限界に達する前に周囲が気づけるかもしれない。たとえトラブルを未然に防げなくても、本人も周囲も経緯を理解しやすくなり、対処も容易になるだろう。精神障害という大いなる弱さをもっているからこそ、情報を公開しなくては生きられず、それが相互理解、相互支援に基づいたつながりという、得難い大きな恵みをもたらすのである。

当事者研究は、この「弱さの情報」をより立体的に精緻にしていく試みと言える。日々、陥る困った状況をワクワクに変えながら、自ら探究の主体となって、弱さの構造（これをよく「苦労のメカニズム」と呼ぶ）を解き明かしていくのだ。

当事者研究誕生のエピソードは示唆的である。2001年のある日、「爆発」（べてる用語で、感情を爆発させ、自傷を含む暴力や暴言に至ること）を繰り返す統合失調症の当事者、河崎寛を前にもはや打つ手がなくなり、ほとんど困り果てたソーシャルワーカーの向谷地育良が、「一緒に「河崎寛」とのつきあい方と“爆発”の研究をしないか?」と持ちかけた。この時、「やりたいです!」と答えた河崎の目の輝きを、向谷地はいまも忘れられないと言う。

彼自身、困り果てていたはずの河崎の目を輝かせたものは何か? それは「研究」というキーワードだった。そしてそれは、河崎に続く多くの当事者研究者をこの十数年、魅了し続けているものでもある。だが、「研究」の何がそんなに魅力的なのだろう? 私自身、当事者の一人なので経験的によくわかるが、精神科患者はうまくいかない自分を見つめ、反省することには慣れている。というより、見つめ続け、反省し続け、それでもうまくいかないことに絶望し切っている。その絶望に楔を打ち、困っている自分（研究主体）と困りごと（研究対象）を切り分け、謎の対象に迫る科学者のようなワクワクとともに自らの弱さを眺め、解剖する手助けをしてくれるのが、「研究」というキーワードであり態度なのである。

当事者研究は、長年の、あるいは日々の「苦労のメカニズム」を解明する喜びに満ちている。と同時に、痛みを伴う作業でもある。一般に人は、なぜこうなるのかわからないということも含めて、慣れ親しんだ「私」についての物語をもっているものである。しかし当事者研究では、少し距離を置いた研究者としての自分から、あるいは共同研究者である仲間から、その物語に遠慮のない突っ込みが入る。物語は根本から洗い直され、時に大きく書き換えられる。そのプロセスが痛まないわけではない。だが、更新された物語が腑に落ちた時、痛みは快に変わる。そこに当事者研究の醍醐味がある。

さて、ようやく哲学ドラマに話を移そう。私が初めて哲学ドラマにかかわったのは、2014年10月13日に開催されたワークショップ「愛すること 愛される

こと：『恋愛』の当事者研究～演劇という『空想』を通して『恋愛』を哲学する～」であった。この時は、ワークショップ後半のフォーラムダイアログにおいて、パネリストの一人として、主に当事者研究にかかわってきた者の立場からコメントを述べるというのが私の役割だった。

ワークショップを一参加者として体験した私は、次のように述べた。哲学ドラマが当事者研究であるなら、その痛みはほんのりしている、と。哲学ドラマでは、当事者研究のように自らの弱さをテーブルの上に広げ、仲間とともに腑分けしていくということはない。ワークのなかで、自己について何かドキッ、ズキッとするような気づきがあっても、それはそっと胸の内にとめておくことができる。もちろん望めば、物語を演じるなかでそれを表現してもいいが、しかし自分のことだと告白する必要はない。弱さが直接、他者の目に触れることはないのだ。

しかし、弱さの情報の公開と共有は、当事者研究を成り立たせている基礎であり肝である。それを欠いて、果たしてまだ当事者研究であり得るのか？ たとえ当事者研究であるとしても、痛みと快が同居する当事者研究の醍醐味が失われることはないのか？ そうした疑問を私は、「哲学ドラマの痛みはほんのりしている」という言葉で表わした。痛みがほんのりしているのであれば、ワクワクも喜びもまたほんのりと穏やかなものに留まるのではないかと、との含意を込めて。

だが、そうした穏やかさは、実はあらかじめ意図されたものであった。フィクションという層を挟み込むことにより、弱さをダイレクトに露わにしなくてよい構造を取ってつくっていたのだ。その根底には、弱さの情報公開の困難をめぐる問いかけがあった。

上にも少し書いたが、一般の社会では、弱さを大っぴらに曝け出すことはあまりよしとされないことが多い。弱さを見せることで不利になることも、残念ながら少なからずある。そんななか、弱さを隠して生きている人も多いのではないだろうか。少なくともかつての私はそうだった。しかし実際には、ないことにしようとしてもできないたくさんの弱さを抱え、自分自身も苦しく、周囲とも軋轢を引き起こしていた。そして多方面にわたって無理を積み重ねた結果、破綻して、治療につながるようになった。仕事も辞めざるを得なかった。

そうして当事者となってからは、できないこと、しんどいことを周囲に伝え、助けを求めながら生きるほかなくなった。弱さを隠しても見えてしまうし、そもそも隠したままでは生きられないから、情報公開するほかなくなったのである。そしてそのためには、弱さの情報自体を立体的で精緻なものにする必要があった。だからこそ、痛みを伴う作業であっても、当事者研究に飛び込み、仲間に弱さを曝け出して、その構造を知ろうとした。

ところが、十数年にわたる治療と数年の当事者研究を経て、自分の弱さの構造

がある程度わかるようになり、荷降ろしもできて回復してくると、弱さの情報を公開しなくてもなんとかなる場面が増えてくる。しんどくてもちょっと無理をすれば切り抜けられることが増え、無理による心身のダメージもあまり長く後を引かなくなる。すると、ためらいや遠慮といったものが働いて（いったいなぜ、何をためらい、何に遠慮しているのか?）、弱さの情報公開がだんだんしにくくなる。

こうした私自身の経験、そしてべてるの家の例は、弱さの情報公開をめぐる逆説を表わしている。すなわち、一人で背負いきれないような弱さは、弱さの情報公開を困難にするどころか、むしろ可能にする。そして、そこまでではない弱さは、（ここで論ずる余裕はないが）さまざまな要因が働いて、公開が難しい。

問題は、弱さの情報公開ができるほど充分に弱くはないが、しかしさまざまな弱さを抱え、しんどさを堪えて生きている人たちだろう。そういった人たちはおそらく少数ではない。それどころか、むしろ大多数かもしれない。彼らにとって、当事者研究は参加しやすいものではない。哲学ドラマは、主にそうした彼らに向け、フィクションという媒介を通して、弱さを直接、扱う負担を回避しつつ、より安全に日頃、押し込めている経験や感情に触れ、気づき、表出する機会を提供することを目指し、構想されている。つまり、私が「ほんのり」と表現した痛みの穏やかさは、そもそも仕掛けの一部だったのだ。

では、「痛みがほんのりしているのであれば、ワクワクも喜びもまたほんのりと穏やかなものに留まるのではないか」との疑問はどうか？ 確かに当事者研究のような、どうにも行き詰まって身動きできない状態を痛みとともに突破していくスリルと快楽はないかもしれない。しかし、演劇という身体表現を通じて自分ではない他者の物語を生き、そこから浮かび上がってきた問いを哲学的に探究するという多重の構造をもつ哲学ドラマには、別のワクワクと喜びがあるはずだ。

念のため付記しておくが、べてるの家などでは、当事者研究にもロールプレイといった演劇的要素が取り入れられている。だが、基本的には現実的な状況を再現するものであり、まったく架空の物語を演じることはない。ただ、鍵となるような場面を身体的に演じ、体験することが当事者研究に資することは確かである。

最後にもう一度、「哲学ドラマが当事者研究であるなら、その痛みはほんのりしている」という私の最初の発言に立ち戻りたい。いま思えば、「当事者研究であるなら」という前提がずれていた。哲学ドラマは当事者研究を一つの原点にもっているが、しかし別物であり、別の射程、別の可能性を有している。また、今回はまったく触れなかったが、もう一つの原点である哲学対話についても同様だろう。その別の可能性をどのように探究し、発展させていけるかが今後の課題であると、いまでは企画にかかわる者の一人として認識している。

哲学を想像し、演劇を創造する「哲学ドラマ」

大谷賢治郎

演劇とは何か。それは人を思うことだと筆者は思っている。幼少の頃からお芝居を観ることが好きであった筆者は、自分が登場人物になったつもりで空想し、自分が物語の中に生きることを空想するのが好きで、その空想好きが、そのままアメリカへの演劇留学、そして現在の演出と言う仕事に繋がっているのだが、ようやく演劇を理論的に捉えるようになった今、演劇は人を思うことであるという至ってシンプルな、しかし本質的な結論に至った。そして、最近では俳優や演出という枠を越え、演劇がなしえる可能性を模索し、様々な形で演劇を応用した活動を行っている。

本題に入る伏線として、取り上げたい活動の一つは、小学生・中学生を対象にしたタブーを扱った演劇ワークショップだ。簡単に説明をすると、子どもたちに彼らが「話しにくいこと、話してはいけないとされていること」を分かち合ってもらい、それらを題材にシーンを創る、もしくは実際にある戯曲のシーンに登場してもらい、自分たちの実生活における「話しにくいこと」と関連づけてみると言った内容のワークショップなのだが、ここで最も重要にしているのは彼らに想像力を使ってもらうということだ。当たり前のことのように聞こえるが、普段の学習に於いて想像力があまり使われていないのが事実だ。問題を与えられ、答えを教わる。どうしてそういう答えになるのか、どうしたらその答えを導き出せるのか考えるための時間はあまり与えられない。従って、ワークショップではなるべく自分で考えてもらうよう努めている。シーンを創ることで、シーンに登場することで、自分がその場にいることを想像する。もし自分がその人の立場だったらと想像する。彼らにとって「話しにくい」いじめのこと、家庭での親の喧嘩のこと、人が死ぬこと、差別のことについて、自分たちで想像してみる。自分ではない誰かの役を演じることで、その役の気持ちを理解し、自分の実体験と重ね合わせてみる。日常という現実について、演劇という空想を通して想像力を働かせるのだ。読書のように座って一人で頭だけで想像するのではなく、自分のからだ、自分の声で、そして他の人（共演する子どもや俳優）との関わりを通して、想像を実体験するのだ。自分がその役の立場になることで、相手の気持ちを理解する、人を思いやるといった、演劇用語でいうところの「当事者性」を学ぶことができる時間を共有するワークショップを筆者は行なっている。

こういった演劇を応用する活動をしている中、「当事者研究」と「哲学対話」

に於ける哲学ドラマワークショップのお話しを頂き、即座にこちらからも共同作業を懇願した。我々が「当事者性」と言っている演劇性と「当事者研究」、他者との関わりに於いて初めて成立する演劇性と「哲学対話」が相互を刺激し、新しい演劇応用の可能性が見出せると思ったからだ。タブーワークショップで「話しにくいこと、話してはいけないとされること」と向き合うのと同様に、「当事者」が「当事者」について研究するとき、対峙するとき、筆者は演劇という空想が一つの方法として成立すると考え、松山侑生や水谷みつと協力しながら、これまでのP4Eに於ける演劇（的）ワークショップを実践してきた。恋愛をテーマに、究極の選択と向き合う、寺山修司による「人魚姫」のテキストを用いてのワークショップでは、参加者はお互いが作るシーンに時に笑いながら、軽やかになりながら、それぞれ抱える、それぞれの理由での恋愛の障壁について、他人の演技を通して、また自分の空想を通して気づき、共感を覚えた（と思う）。また、北海道浦河町「べてるの家」で行った、宮沢賢治作「銀河鉄道の夜」のテキストを用いてのワークショップでは、「喪失と幸福」をテーマに参加者は銀河鉄道の乗客になり、自ら抱える障害を「専門性」として捉え、その立場から語り、登場人物の心の葛藤を擬人化し、演じた（その4ヶ月後に東京でも凱旋ワークショップを行った）。これらのワークショップは決して問題（という言葉が適しているかはわからないが）を解決するためのものではなく、自分の中に抱えているものと他人が抱えているものを、想像を通して共感できる場所を共有することを目的としていたので、参加者が、少しでも「共感性」を持ってきていればと思う。

さて、冒頭で「演劇は、人を思うことである」と述べたが、実際は「芸術は、命を想うことである」と大きく出たいところが本音である。恥や語弊を恐れずというとするのであれば、筆者は思う、芸術は絵画も映画も音楽もそして演劇も、命あるものに想いを馳せ、命あるものに思いを巡らしているのだ。筆者もアシテジ国際児童青少年舞台芸術協会の活動を通して、世界中のアーティストと交流を深める機会があるが、皆、新しい若い命に関心を抱き、彼らとの対話を望み、決して奪われてはならない彼らの権利を尊重する。それは命の尊重であり、人としての敬意を表するものである。そこで筆者が思うのは、哲学者も科学者も心理学者も医学博士もアプローチは違えども、同じ方向を向いているのではないかということだ。これからの時代、異分野の共同作業が重要視されるべきだし、筆者もそれを望む。一人の芸術家が子どものために演劇を創る重要性を訴えるとき、一人の心理学者の発達心理の研究がその重要性を支えるだろう。そして一人の科学者が乳幼児の生まれもつての音楽性を証明したとき、一人の芸術家はその実証を支えるだろう。「哲学ドラマ」もまた、まだまだ新しい分野ではあるが、それぞ

れの専門家が「人を思う」ことを研究し、実証し、空想から表現へと共同作業を通して繋げていくだろう。

